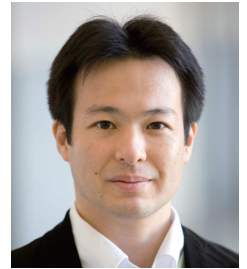


連載「中東 混沌の中の秩序」第8回 湾岸諸国の「アフリカの角」地域への進出 ——その可能性とリスク



東京大学 先端科学技術研究センター 准教授 池内 恵

湾岸諸国による「アフリカの角」地域への進出が加速している。本稿では、近年のUAEやサウジアラビアによる海外基地展開の最新の動向を押さえ、それらがもたらしうる経済発展や安全保障の強化につながる肯定的な可能性を論じつつ、そこに潜在的に秘められているリスクにも目を向ける。

「アフリカの角」は通常、ジブチ、ソマリア(及び未承認国家のソマリランド)、エリトリア、エチオピアなどを含むアフリカ大陸北東端の地域を指す。この地域は紅海のインド洋方面への出入り口であるバブール・マンデブ海峡を扼す戦略的・地政学的に重要な位置にあると共に、エチオピアからケニア、タンザニアに至る経済発展の著しい地域を後背地としている。

湾岸諸国は近年に、「アフリカの角」とその周辺地域への、経済的な、そして軍事的な進出を進めている。これは東アフリカへの中国による経済進出と軌を一にしており、経済発展と機会の拡大につながる可能性を秘めている。しかし同時に、湾岸諸国の「アフリカの角」への進出に安全保障上の様相が加わるにつれて、サウジアラビアとイランの戦略的な競合がこの地域でも強まり、さらに湾岸諸国とエジプトなどの間のアラブ諸国間での競合や摩擦の危険性も高まる。そしてアフリカ諸国の内部・相互の対立や紛争に湾岸諸国が巻き込まれる可能性も出てきている。湾岸諸国の「アフリカの角」への関与の増大は、中東とアフリカにおける紛争をアフリカの角、紅海岸地域に転移させ、アフリカの現地の紛争と中東起源の紛争を結合させる危険性を内包している。

「アフリカの角」を含む、あるいはそれと部分的に重なる、環紅海岸地域への軍事的進出については、筆者はすでに複数の論考で取り上げてきた⁽¹⁾。それらの論考では、バブール・

(1) 池内恵「[サウジ・イラン関係の緊張—背景と見通し](#)」『中東協力センターニュース』2016年1月号, 14-25頁
池内恵「[エジプト・サウジのティラン海峡二島「返還」合意—紅海沿岸地域の安全保障体制に向けて—](#)」『中東協力センターニュース』2016年4月号, 9-20頁
池内恵「[バブール・マンデブ海峡をめぐる緊張の高まりとその背景](#)」『中東協力センターニュース』2016年10月号, 11-16頁
池内恵「『大国エジプト』の没落と再興—紅海岸諸国の雄としての台頭」『国際問題』2016年11月号, 13-19頁
池内恵「[中東の安全保障上の争点は紅海岸地域にシフト](#)」『フォーサイト』2016年10月11日

マンデブ海峡を中心とする、国際通商の要路の安定通行に関わる戦略的問題として対象課題を規定し、そこにおける湾岸諸国の結束に分析の主眼を置き、湾岸諸国とエジプトなど北アフリカのアラブ諸国との間の協調の可能性に焦点を当てていた。しかし、最新の展開を踏まえて、本稿では、主要当事者間の競合や不和、さらには紛争に発展するあるいは紛争に巻き込まれるリスクをも視野に入れて論じていく。

1. 湾岸産油国のアフリカの角・紅海沿岸地域への軍事的進出

まず近年の湾岸諸国によるアフリカの角地域への軍事的進出の最新の動向を見てみよう。顕著なのは、アラブ首長国連邦(UAE)による野心的な基地展開である。UAEは2015年9月以来⁽²⁾、エリトリア最南部のジブチとの国境に近いアサブの港湾を租借し、大規模に軍港と飛行場を整備して⁽³⁾、対岸のイエメンへの軍事介入のための拠点として用いている。また、2016年9月には、ソマリア北西部の未承認国家ソマリランドのベルベラ港を30年間租借する契約を、ドバイのDPワールドが結んだ⁽⁴⁾。DPワールドはかつてソマリランドの隣国ジブチの港湾を同様に租借して、ジブチの「アフリカの角」地域の流通のハブとしての地位を得るに至る開発を推進した。UAEはベルベラ港への経済的な開発に関与するだけでなく、港湾の軍事的な利用を求めて交渉していると伝えられる⁽⁵⁾。

サウジアラビアはジブチと安全保障協定を締結し、ジブチに軍事基地を建設する交渉を進めている⁽⁶⁾。ジブチは2016年1月のサウジ・イランの外交関係断絶に追随して対イラン断交を行っており、サウジがジブチに対して外交攻勢を強め安全保障面でも関係強化を進めていることが表れてきている。

ジブチへの軍事的な進出は湾岸諸国に限定されたものではない。米国は2002年以来ジブチの国際空港に隣接したキャンプ・レモニエを租借して大規模な基地を建設し、「アフリカ

(2) “The Emirati Navy Arrives in Eritrea,” *Stratfor*, October 29, 2015.

<https://www.stratfor.com/analysis/emirati-navy-arrives-eritrea>

(3) “The UAE Joins an Exclusive Club,” *Stratfor*, December 8, 2016.

(4) “DP World to Manage Somaliland Port of Berbera: Company Will Own 65% of Joint Venture with Somaliland Government,” *The Wall Street Journal*, September 5, 2016.

<http://www.wsj.com/articles/dp-world-to-manage-somaliland-port-of-berbera-1473086050>

(5) “United Arab Emirates Wants to Open Military Base in Somaliland,” *Sputnik*, January 13, 2017.

<https://sputniknews.com/middleeast/201701131049542386-uae-wants-military-base-somaliland/>

(6) “Djibouti Finalising Deal for Saudi Arabian Military Base,” *Financial Times*, January 17, 2017.

<https://www.ft.com/content/c8f63492-dc14-11e6-9d7c-be108f1c1dce>

“Saudi military base in Djibouti on track,” *Gulf News*, December 5, 2016.

<http://gulfnews.com/news/gulf/saudi-arabia/saudi-military-base-in-djibouti-on-track-1.1940029>

“Saudi Arabia ‘to open military base in Djibouti,’” *Gulf News*, March 8, 2016.

<http://gulfnews.com/news/gulf/saudi-arabia/saudi-arabia-to-open-military-base-in-djibouti-1.1686291>

の角」地域での対テロ戦争の遂行の拠点としてきた。旧植民地宗主国のフランスも大規模な基地を維持している。2009年以来ソマリア沖の海賊への対処のために海上自衛隊艦船を派遣している日本も、2011年以来ジブチの国際空港に隣接した地域に基地を設置しているが、近く規模拡充を行うという意図が示されている。

これに関連すると見られるのが中国の進出で、2016年10月にはジブチとエチオピアの首都アディスアベバを結ぶ電化鉄道を開通させ、ジブチのオボクに大規模な軍事基地を建設する過程にある。

また、エジプトやトルコも紅海岸に軍事的な拠点を築く計画があるものとされており、その場合やはりジブチ、あるいはエリトリアやソマリランドが候補となるものと見られる。紅海岸地域の軍事的な「過密化」とも形容できるような状況が生じており、その中で湾岸諸国の活動の活発化が目立っている。

2. 湾岸諸国の関与の理由

近代史上において多くの時期は軍事大国とはみなされてこなかった湾岸諸国、それも直接は紅海やアフリカ大陸に隣接していない UAE が、野心的な軍事的な基地展開をアフリカの角地域において行っていることに、どのような背景と意図が認められるだろうか。

短期的・直接的には、湾岸諸国が2015年3月以来行っているイエメン内戦への軍事介入の拠点として、ジブチやエリトリアやソマリランドの重要性が高まったことが挙げられる。また、イエメン内戦への軍事介入に踏み切った背景要因として、イランによるイエメン北部を拠点とするフーシー派への支援を、湾岸諸国が強く疑っていることがあるが、イランのアフリカの角・紅海岸地域への進出を未然に阻止するためにも、この地域への外交・安全保障上の関与を強める必要性が認識されているといえよう。

ただし、近代史に限定せず、より長期的に歴史を振り返った場合、ペルシア湾岸地域から「アフリカの角」および東アフリカへの進出はめずらしいことではない。1869年当時を描いたスタンレーの『リヴィングストン発見記』にも記されているように、東アフリカの沿岸地帯にはアラブ人商人が拠点を築き、奴隷貿易や象牙取引を中心的に担っていた。スタンレーはザンジバル島からタンザニアの内陸部に川筋を伝って遡りタンガニーカ湖畔に到達するが、そのルートを開拓し居留地を建設して、西欧人の「探検」や「観光」のイン

筆者紹介

1996年、東京大学文学部イスラム学科卒。アジア経済研究所研究員、国際日本文化研究センター准教授を経て、2008年10月より現職。ウッドロー・ウィルソン国際学術センター客員研究員、ケンブリッジ大学客員フェロー、アレクサンドリア大学客員教授などを兼任した。中東地域研究、イスラーム政治思想を専門とする。主要著作に『現代アラブの社会思想—終末論とイスラーム主義』（講談社、大佛次郎論壇賞）、『アラブ政治の今を読む』（中央公論新社）、『書物の運命』（文藝春秋、毎日書評賞）、『イスラーム世界の論じ方』（中央公論新社、サントリー学芸賞）、『中東危機の震源を読む』（新潮社）、『イスラーム国の衝撃』（文藝春秋、毎日出版文化賞・特別賞）。最新の著作は『増補新版 イスラーム世界の論じ方』（中央公論新社）、『サイクス=ピコ協定 百年の呪縛』（新潮選書）。

個人ブログ「中東・イスラーム学の風姿花伝」(<http://ikeuchisatoshi.com/>)でも情報発信中。

フラを提供していたのはアラブ人だった。湾岸諸国が西欧諸国の植民地主義支配下に置かれ、国民国家形成に専念し、米国の安全保障の傘の下で産油国としての経済発展を進めたことで、アフリカへの進出の機運が削がれた時期はむしろ例外だったとも考えられる。

米国の中東地域での覇権が希薄化し、イランのペルシア湾岸地域での台頭が著しい現在、アラブの湾岸諸国が経済的な進出の場所として、そして安全保障上の観点からも、「アフリカの角」から紅海岸や東アフリカに独自の進出を進めることは、必然的な流れとも言える。

湾岸諸国は以前から、食の安全保障や水の安全保障といったより広い意味での安全保障の観点から、東アフリカへの進出を進めてきた。エチオピアやスーダンなど、湾岸諸国に乏しい水資源を有する諸国に農業開発で投資を行い、食糧の自給能力を高める政策である。ここに近年のイランの伸張とイエメンなど周辺国の不安定化に伴い、ジブチやエリトリアやソマリランドなどへの軍事基地の展開が加わった。

3. 対立・紛争の芽

アフリカの角及びその付近の環紅海地域や東アフリカ地域への湾岸諸国の関与は、安全保障上も、経済発展上も、複数の異なる当事者に利益をもたらす、いわゆる「win-win」の協調関係を成立させる可能性をもたらす。サウジアラビアは、スエズ運河を擁して紅海の安全保障に死活的な利益を共有するエジプトと、相互補完的に安全保障上の協力関係を結び得る。また、UAEのドバイが得意とする港湾開発は、中国の内陸部進出と連動して、東アフリカの経済発展の果実を共に享受する可能性を開く。

しかし近年の湾岸諸国の軍事的な進出は、複数の当事者間の競合を激化させ、不和が紛争をもたらす事態を招く危険性を秘めている。まず、サウジアラビアなど湾岸諸国の「アフリカの角」への進出がイランを仮想敵としたものであれば、イランとの競合・摩擦が紅海を超えて持ち込まれることになりかねない。それだけではなく、協調して進出する湾岸諸国やアラブ諸国の間に、さらにはそれを受け入れるアフリカ諸国の間にも、摩擦や紛争の種が見出される。

アフリカの角への湾岸諸国・アラブ諸国の関与が紛争をもたらすのは以下のような場合が考えられるだろう。

第一に、関与する主体の側、すなわち湾岸諸国とその同盟者の側の分裂・亀裂と競合・対立の構図を、関与の対象となる「アフリカの角」地域とその周辺に持ち込む場合である。

第二に、逆に、関与する対象である「アフリカの角」地域内部やその周辺の分裂・亀裂と競合・対立の構図の中に、湾岸諸国やそれと協調や競合を織り交ぜた関係を結びながら関与する主体が、絡めとられる場合である。

湾岸諸国内部では、サウジアラビアとUAEの足並みも、常に一致しているとは言えな

い。UAEはジブチとの極端な関係悪化を経て、ジブチが対立するエリトリアや、ジブチと港湾開発で競合するソマリランドに接近した。それに対してサウジアラビアはジブチとの安全保障上の関係強化を進めている。

そして、サウジアラビアは「アフリカの角」地域への進出でエジプトとの摩擦を強めている。サウジアラビアがジブチへの基地建設で紅海の安全保障の主導権をエジプトから奪いかねないこと、そしてサウジがエチオピアの農業開発に関与し、ナイル河の水利をエジプトにとって著しく阻害するルネサンス・ダム建設に好意的な姿勢を示したこと⁽⁷⁾が、エジプトが態度を硬化させる要因となっている。ティラン海峡のティラン島とサナーフィール島のサウジへの「割譲」に対する世論の反発も根深く複雑な法廷闘争が続いている⁽⁸⁾。

エジプトは2017年1月5日に正式に南方艦隊を発足させ、紅海岸サファーガを拠点にバール・マンデブ海峡に至る紅海岸一円の安全保障に主導的役割を果たすことを誇示している⁽⁹⁾。

サウジアラビアのサルマーン国王就任以来、エジプトのスイーサー政権とサウジはムスリム同胞団への姿勢に相違が出てきていると見られ、シリア内戦をめぐってエジプトが国連安保理でのサウジの意に反する投票行動を示すなど、亀裂は広がっている⁽¹⁰⁾。直接の関係は分からないものの、サウジアラビアによるエジプトへの経済援助が一部差し止められる事態に発展している⁽¹¹⁾。

「アラブ世界」としての一体性や、「スンナ派」としての共通性を有し、「イラン」を仮想敵とする戦略的な利害の一致があり、産油国と人口大国・軍事大国との相互補完関係もある湾岸諸国とエジプトの間でも、主導権をめぐって競合と摩擦があり⁽¹²⁾、容易に集団的な安全保障の体制が形成されることはなさそうである。

同様に、湾岸諸国の進出を受け入れる「アフリカの角」および東アフリカ諸国の側にも、

(7) “Saudi visit to Ethiopia angers Egypt,” *Middle East Monitor*, December 21, 2016.

<https://www.middleeastmonitor.com/20161221-saudi-visit-to-ethiopia-angers-egypt/>

(8) 金谷美紗「エジプト：最高行政裁判所がサウジへの2島引渡し合意を無効と判決」『中東かわら版』No.159, 中東調査会, 2017年1月17日

https://www.meij.or.jp/kawara/2016_159.html

(9) “Looking South,” *Al-Ahram Weekly*, 12 January 2017.

<http://weekly.ahram.org.eg/News/19318/17/Looking-south.aspx>

(10) “Are Cairo, Riyadh in a messy ‘political divorce’?,” *Al-Monitor*, December 28, 2016.

<http://www.al-monitor.com/pulse/originals/2016/12/egypt-saudi-arabia-visit-ethiopia-renaissance-dam.html>

(11) “Saudi oil shipments to Egypt halted indefinitely, Egyptian officials say,” *Reuters*, November 7, 2016.

<http://www.reuters.com/article/us-egypt-saudi-oil-idUSKBN1320RQ>

(12) “Why Saudi Arabia and Egypt are competing for influence in Africa,” *Al-Monitor*, January 11, 2017.

<http://www.al-monitor.com/pulse/originals/2017/01/saudi-arabia-egypt-conflict-appear-in-africa-over-influence.html>

摩擦や紛争の種が多くある。エチオピアとエリトリアの紛争を背景にして、UAEのエリトリアへの軍事的進出にはエチオピアの警戒感が強い。さらに、2016年以降顕在化しているエチオピアの国内の反体制勢力の活動を、エリトリアとその背後のエジプトが扇動しているとエチオピアは非難しており、UAEの関与はエジプトと共にエチオピアの国内の情勢不安を促進するものとみなされている。

ジブチとエリトリアも同様の紛争を抱える。ジブチと競合する港湾施設のソマリランド・ベルベラへの建設に際しては、ジブチのイスマイル・オマル・ゲレ (Ismail Omar Guelleh) 大統領と不和となって放逐されたアブドゥラハマン・ボレ (Abdourahman Boreh) に UAE が接近して推進していると見られる。ボレは元来ジブチの港湾開発を担った人物だが、これを競合するベルベラの港湾開発に関与させることになる。アフリカ諸国の国内の分裂に湾岸産油国が踏み込んで利用していく形になっている。

湾岸・アラブ諸国の内部と、アフリカ諸国の内部にあるそれぞれの分裂と、それらが合わさって湾岸アラブ・アフリカ関係が阻害されたのが、2016年11月17日-23日に赤道ギニアのマラボで開催された第4回アフリカ・アラブ首脳会議である。ここではモロッコが支配下に置く西サハラで独立運動を行っているポリサリオ戦線の代表の出席をめぐって、サウジアラビアや UAE など湾岸諸国(クウェートを除く)が直前にボイコットしてモロッコを支持したのに対して、エジプトは出席してアフリカ諸国の多数の側について見せた⁽¹³⁾。これはサウジなど湾岸諸国の「アフリカの角」地域への軍事的進出へのエジプトの対抗姿勢を示したものとも読み取れる。

「アフリカの角」地域は地政学的・戦略的な重要性を持ち、エチオピアやケニアなど東アフリカの経済発展著しい地域を後背地に持つことから、中国など域外の新興の経済大国や、サウジアラビアや UAE、あるいはエジプトなど周辺地域大国・有力国の進出が進む。ソマリア南部のアッ=シャバーブのような武装集団も活動の範囲を広げ、一方でケニアやエチオピア、他方でソマリア北部のプントランドやソマリランドなどにも攻撃が及ぼうとしている。「アフリカの角」地域は大きな発展の可能性を秘めつつ、競合や摩擦や紛争の種を多く抱え、リスクもまた高まってきているといえよう。

* 本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。

(13) “Al-Sisi Attends Arab-African Summit in Guinea amid Moroccan withdrawal,” Daily News Egypt, November 23, 2016.
<http://www.dailynewsegypt.com/2016/11/23/600824/>